

# 養蜂で秋田県農業の一助となりたい！

あきだで活きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



八峰町石川

米森養蜂園 代表 米森 朋子

## 経営概況

養 蜂 | 養蜂箱100群※(1群 約3万匹)  
構 成 員 | 基本代表1名で作業、繁忙期に作業  
手伝い(母、友人)2名程度  
販 売 先 | 道の駅、ネット通販、ふるさと納税  
直販



※ミツバチは、ひとつの巣箱を「群(ぐん)」  
という単位で数える。

米森養蜂園

秋田県北西部に位置し、日本海と世界自然遺産白神山地の豊かな自然に囲まれた町、八峰町でミツバチの飼育から採蜜作業に昼夜を問わず奔走する一人の女性がいます。養蜂業を営んでいた祖父が、昭和38年の「石川の大火」により、継続を断念した思いを汲み、経験値ゼロから養蜂業に取り組んだ米森さんの悪戦苦闘の日々や将来の夢について紹介します。

## ▶ きっかけ

八峰町で生まれ育った米森さんは、高校卒業後に上京し、貿易関係の会社に勤めていましたが、30歳の時に家庭の事情により、急遽リターンすることになりました。帰郷後は、農家として生きる道を考え、実家の畑でミョウガやキウイの生産を始めました。その際、祖父からキウイの受粉に「養蜂なら教えられる」とミツバチを活用する提案を受け、迎え入れたことが養蜂業の入口だったそうです。



当時の苦労話を語る米森さん

## ▶ 経験値ゼロ悪戦苦闘の日々

「養蜂なら教えられる」と言われたものの、祖父からの直接指導はなく、地域に教えてくれる人も居なかつたことから、令和元年頃に巣箱1群で趣味レベルでのスタートだったそうです。インターネットを駆使したり、遠方の養蜂家へ

出向き、「ミツバチの生態」や「養蜂とは？」等を独学で学びました。その中で、受粉媒介者としてのミツバチの役割に深く感銘を受け、養蜂業一本で行くことに決めました。



そば畑で採蜜に励むミツバチ

## ▶ 養蜂業は苦労の連続

現在は、約100群のミツバチを飼育して、4月から7月が採蜜の繁忙期となります。採蜜場1か所に約20～30群を軽トラックに積み、花の開花期に合わせて、群の移動のため野山を駆け回るそうです。基本、夜間に群の積み降ろしを行うことから、この期間は、重労働と睡眠不足が重なります。8月から10月には、地域のそば畑の受粉に協力しており、地域農業への貢献を実感しているそうです。11月になると越冬準備に入る等、年間を通じて多忙を極めており、何度辞めようかと

思ったとのこと。しかし、丹精込めて育てたハチ達が懸命に蜜を採取する姿を見るたびに愛着も深まり、生業として続けると思いつが強くなるとのことです。



米森養蜂園のハチミツ商品(一部)

## ▶ これから…

米森さんは、「養蜂を始めて7年目ですが、まだまだ技術も経験も不足です。」と話します。ですが、今後は、100群規模で、毎年、最低限必要な採蜜量を確保する体制を築くこと。その上で人を雇用できたら…。将来的には、耕作放棄地での養蜂の活用、野菜や果樹農家との連携等、地域の美しい環境が失われないよう秋田県農業へ養蜂で貢献できればと壮大な夢を話していただきました。

(●印写真:米森養蜂園提供)

